

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32816

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03119

研究課題名（和文）発達に課題がある子どもへのチームスポーツ指導プログラムの開発とその評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of a team sports coaching program for children with developmental difficulties.

研究代表者

藤後 悦子（TOGO, ETSUKO）

東京未来大学・こども心理学部・教授

研究者番号：40460307

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：青少年のスポーツ環境が急速に整いつつあるが、一方でハラスメントの問題も後を絶たない。多くの子ども達にとって身近な地域スポーツは、ボランティアが指導者を担っている場合が多く、チームの保護者も含めて子どもの発達や対応に関して学ぶ機会が少ない。そこで、本研究でははじめに指導者やチームの保護者達が直面する子どもへの対応の困り感の実態を把握し、これらとスポーツハラスメントとの関連を明らかにした。続いて、合理的配慮の観点から地域スポーツにおける発達に課題がある子どもに対する運動プログラム、スポーツコーチング及びスポーツペアレンティングプログラムを開発し、その効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達に課題がある子ども達への運動プログラムおよび指導者のスポーツコーチング、親のスポーツペアレンティングプログラムを開発し、地域スポーツへの還元を重視した。本研究では喫緊の課題となっているスポーツ場面でのハラスメントや子どものバーンアウト防止を目的とし、発達に課題がある子ども達の生涯スポーツへの参加を促すことに貢献した。さらに、「合理的配慮」という現在の地域スポーツに欠けていた視点を提供することで、特発達に課題がある子どもにとどまらず全ての子ども達にとってよりよいスポーツ環境を提供することに役立ち、さらにはスポーツにとどまらず地域の教育力・子育て力の向上に寄与した。

研究成果の概要（英文）：While the youth sports environment is rapidly improving, problems of harassment persist. Many community sports, which are familiar to many children, are often led by volunteers, and there are few opportunities to learn about child development and how to deal with children, including the parents of the teams. In this study, we first identified the actual conditions that coaches and team parents face in dealing with their children, and then clarified the relationship between these conditions and sports harassment. Then, from the viewpoint of reasonable accommodation, we developed an exercise program, sports coaching, and sports parenting program for children with developmental disabilities in community sports, and verified the effectiveness of these programs.

研究分野：コミュニティ心理学

キーワード：地域スポーツ ハラスメント 合理的配慮 発達障害 指導者 応援ハラスメント 保護者 教材開発

## 1. 研究開始当初の背景

地域スポーツは、ボランティア主体のものが多く、小学校区域を基盤としているので児童が誰でも気軽に参加しやすい。しかし高学年になると、勝利至上主義の色が強くなることで増え、チームに貢献できない子どもおよびその親へのスポーツハラスメントの問題が浮かび上がってくる。地域スポーツは親の送迎や当番、付き添い等が不可欠である。そのため申請者らは、親の視点を取り入れたスポーツハラスメントモデルの検証、スポーツハラスメントとスポーツペアレンティングの関連を検証し、その結果を踏まえたスポーツハラスメントやスポーツペアレンティングモデルの検証を行い、ハラスメント防止プログラム「Player's First」を開発して、一定の成果を得た。しかし、同時に申請者らが実施した調査から、発達に課題がある子どもがスポーツに関わる際に、チームになじめない、競技レベルが高まらないという子どもの困り感、うまく指導できないという指導者の困り感、チームにうまく適応できないという親の困り感が存在することが明らかになった。加え、発達に課題がある子どもへの周囲の無理解や対応知識の欠如から、子どもを力で押さえようとする支配的なスポーツハラスメントが発生しやすい現状が確認できたが、国内では、地域スポーツにおける発達に課題がある子どもの現状や効果的な指導方法に関する研究は、ほとんど見当たらなかった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は下記の通りである。

- (1) 地域スポーツの指導者と親に焦点をあて、発達に課題のある子どもへの困り感の実態を把握する。
- (2) 子どもの特性と、指導者の困り感とスポーツハラスメント、親の困り感と応援席ハラスメントとの関連を明らかにする。
- (3) 合理的配慮の観点から地域スポーツにおける発達に課題がある子どもへの対応に関する指導者および親向けの研修プログラムを開発し、その効果を検証する。

## 3. 研究方法

本科研の主な研究方法を記載する。

### (1) 実態調査研究 (インタビュー)

#### 研究1：指導者を対象としたインタビュー調査

- ・調査協力者：「地域スポーツの指導者」かつ「発達に課題を抱えた子どもの指導経験がある者」13名とした。
- ・期間と手続き：2018年7月～2019年3月。「ナラティブ・インタビューと半構造化面接の両方の長所を活かそうとする」(Flick, 2007)方法を用いたインタビューを行った。
- ・分析方法：データ分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ Modified Grounded Theory Approach (木下, 2007: 以下, M-GTA とする)を用いた。

#### 研究2：発達に課題がある子どもを持つ親へのインタビュー調査

- ・調査協力者：発達障害の診断を受けた子ども、又は診断は受けていないが発達に課題がある子どもを持つ母親9名。
- ・期間と手続き：2018年7月から2019年10月の間にインタビュー調査を実施した。インタビュー内容は、「(スポーツ活動への参加に際して)コーチやチームメイトとの間で大変だったこと、困っていること」、および「活動中の子どもの様子や、子どもがどんな風を感じているか(楽しそう、嫌そう等)」を中心に尋ねた。
- ・分析方法：M-GTAを用いてデータ分析を行った。

#### 研究3：フィンランドにおけるジュニア期のスポーツに関する調査

- ・調査協力者と手続き：フィンランドの首都ヘルシンキを中心に、保育園およびプレスクール、小学校、地域スポーツ、学童兼プレーパークについて、視察および聞き取り調査を実施した。インタビューは英語で行うとともに、フィンランド語が必要な場合は通訳をつけた。
- ・測定尺度：2019年3月4日、5日、6日。

#### 研究4：小学生対象の地域スポーツにおける「気になる子」の実態

- ・調査協力者：集団競技を扱う地域スポーツに子を参加させている母親を対象にオンライン調査を実施した。小学3年生から6年生までの集団競技を扱う地域スポーツに参加している子どもを持つ母親800名(各学年各性別に100名ずつ割り付け)に回答を依頼した。
- ・期間と手続き：2019年11月下旬にオンライン調査を実施した。
- ・測定尺度：①スポーツ種目、②所属チームの競技レベル、③チーム内の子どもレベル、④子どもの発達について気になることがあるか、⑤精神的健康度(Kessler, Andrews & Colpeetal, 2002)、⑥指導者の動機づけ雰囲気(藤田・蛭原, 2014)⑦子どものスポーツチームの仕事量：「他の親御さんたちと比べて、あなたは「チームの仕事」をどのくらいたくさんしていますか？同学年の平均的なお母さんと比べて考えてください。」と尋ねた)、⑧子どものスポ

一ツチームの仕事の負担量（前問にてお子さんの所属するチームでの親の活動について尋ねた後で、「前述の内容について、あなたは全体的にどの程度負担だと感じましたか？」と尋ねた）。

## (2) モデル検証研究

### 研究5：子どもがもつ困難さと対人的感性—指導者と応援席ハラスメントに焦点をあてて—

- ・調査協力者：スポーツの専門学校生 1483 名（分析対象者は 825 名）を対象に調査を実施した。
- ・期間と手続き：2019 年にスポーツ専門学校に調査用紙を配布し、回収した。
- ・測定尺度：SDQ（Strength and Difficulties Questionnaire：子どもの強さと困難さアンケート）、対人感性（Muranaka et al., 2017）、指導者ハラスメント（大橋, 2022）、応援席ハラスメントは、大橋（2022）の尺度を応援席の内容に改変した。

### 研究6：スポーツの習い事を行う小学生の親の養育態度—SDQ と対象関係に焦点を当てて—

- ・調査協力者：回答者は、子どもが地域スポーツを 1 年以上経験した小学 1 年生～中学 3 年生の保護者（父母）計 1800 名であった。子どもが 2 名以上いる場合は、最もスポーツに力を入れている者を一人抽出してもらった。
- ・期間と手続き：本調査は、2018 年 2 月に調査会社にモニターとして登録している者の中から研究テーマを説明し、匿名にて協力を募った。
- ・測定尺度：スポーツの種類、子どもの競技レベル、チームレベル、親の養育態度に関する尺度（加藤他, 2014）、対象関係尺度（井梅他, 2006）を用いた。

## (3) 教材作成及び評価研究

### 研究7：発達に課題がある子どもに対するスポーツ指導に関する教材開発と評価

- ・調査協力者：心理学系、および保育・教育系を専門とする大学生 260 名。
- ・実施期間と手続き：2021 年 11 月。教材視聴の前後にアンケートを実施し、その変化を検討した。検討のために用いた尺度項目は、場面想定法を用いた発達に課題がある子どもの指導に関する項目や成果・勝利主義的態度などである。
- ・測定尺度：発達に課題がある子どもへの指導場面を設定し、対応の方法について回答を求めた。具体的な場面想定内容および対応に関する場面について、対応の方法を 6 つずつ作成し計 18 項目について 6 件法で回答を求めた。成果・勝利主義は、習い事に対する態度（Togo, et al., 2021）のうちの成果・勝利主義に関する項目を用いた。

### 研究8：親を対象とした発達に課題がある子どもに対する対応方法の教材開発と評価

- ・調査協力者：習い事を行っている配慮が必要な小学生 4 年生から 6 年生の子どもがいる母親 142 名
- ・期間と手続き：2021 年 2 月に実施。オンラインで作成した教材を黙読後、子どもの習い事への意識の変化を検討した。
- ・測定尺度：合理的配慮を伴う養育態度は、藤後・大橋・井梅（2021a）の合理的配慮を伴う養育態度尺度を用いた。習い事に対する価値観は、藤後・大橋・井梅（2021b）の習い事に対する価値観尺度を用いた。教材の評価に関する効果は、教材の効果を検証するために、第一著者が所属する大学の授業評価アンケートを基に項目を作成した。上記の全ての研究において、倫理的配慮がなされており、倫理委員会の承認を得ている。

## 4. 研究成果

### 研究1：指導者を対象としたインタビュー調査の成果

インタビューから得られた内容を分析した結果、「指導者として直面する課題」「他児との関わりでの困難」「保護者との関わり」「子の特性に応じた関わり・工夫」「指導経験を通じた自身の変化」「他児との関わりを指導機会にする工夫」の категория に分けられた。地域スポーツ指導者が発達に課題がある子どもに応じる際に直面する課題があり、特に競技性の高いスポーツでは、短期間で成果を上げるためにも指導者の指示に基づいた技術向上が求められるため難しさを感じていた。一方で、発達に課題がある子どもがいることで他児とピアサポートが可能となり集団が成熟することも示された。今後は指導者の研修機会や保護者理解が課題として示された。

### 研究2：発達に課題がある子どもを持つ親へのインタビュー調査

発達に課題がある子どもを持つ親へのインタビューの結果、7つの categoria 「参加への期待」「参加へのハードル」「指導者との関わり」「競技能力への直面」「他児との関わり」「家庭での葛藤」「場所への希望」が示された。加えて、20 の概念「他児と同じ体験をしてみたい」「苦手な能力を伸ばして欲しい」「参加を断られる」「消極的な競技選択」「常に付き添いが必要」「指導者や他の保護者へのカミングアウト」「指導のなかでの特別な配慮」「前向きに受け入れてくれた指導者」「指導者とのすれ違い」「出来なさを目の当たりにする」「目的のジレンマ」「特性による他児とのトラブル」「他児とコミュニケーションが生まれにくい」「他児に置いていかれる」「他児のサポート」「父母での考え方の不一致」「親子のコミュニケーションが生まれにくい」「啓発活動の場としての活用「受け入れ場所が増えることを希望」が生成された。

保護者は、我が子に発達の課題がありながらも、他児とできる限り同じ活動をさせたいと望み、

そのためのさまざまな努力をしていることが今回の調査からうかがわれた。

### 研究3：フィンランドにおけるジュニア期のスポーツに関する調査

本研究では、発達に課題がある子どもへの合理的配慮を含んだジュニア期のスポーツ環境改善に向けての示唆を得ることを目的とし、フィンランドの子どもの運動やスポーツ環境を概観した。フィンランドの子どものスポーツは Well-Being の視点が徹底されており、発達に課題がある子どもを含めて、子ども達が主体的に運動遊びを行っている様子が確認できた。また体をほぐすための「マッサージ」が運動遊びの中で導入されており、特別支援児の身体の緊張感の高さのほぐれには有効であった。一方で、保育現場で日常的に見られた発達に課題がある子どもへの接し方の工夫や教材、例えば「絵カードの利用」や「目に見える形でのタイムスケジュールの掲示」などの工夫は、地域スポーツの中には見られなかった。

### 研究4：小学生対象の地域スポーツにおける「気になる子」の実態の結果

地域スポーツ参加者の中には、発達または行動に何らかの課題を親が感じるような子どもが約 20%、発達または行動について学校から指摘を受けたことがある子どもが約 11%、さらに、実際に専門機関を利用した経験者も約 4%いるという実態が明らかになった。

子どもの学年ごとに比較すると、中学年では高学年よりも気になる子の該当率が二倍近く高かった。これは、子どもが成長に従って落ち着いていく傾向を示す可能性があるが、合わないという理由で地域スポーツをやめている傾向を示す可能性もあり、一度限りで測定したこのデータから結論を出すことはできない。母親の精神的健康度に影響を及ぼす要因について子どもの性別ごとに検討を行った結果、男児については有意な予測要因が見当たらなかったが、女児においては、発達の遅れが気になる場合や発達の遅れを学校から指摘された場合に母親の精神的健康度が低かった。

### 研究5：子どもがもつ総合的な困難さとスポーツ活動における不安—指導者と応援席ハラスメントに焦点をあてて—

子どもが持つ総合的な困難さと対人的感性、および指導者ハラスメントと応援席ハラスメントとの関連を順位相関にて確認した結果、スポーツ経験者の中に困難を抱える子どもは一定数存在し、発達の困難さと対人過敏過敏性には正の相関が示された。

さらに、指導者ハラスメントと応援席ハラスメントは連動していることも明らかになった。加えて、男子では総合的な困難さが強いほど指導者ハラスメントも強く、女子では、総合的な困難さが強いほど応援席ハラスメントも強くなる傾向が示された (Table1)。

Table1 ハラスメント、総合的困難さ、対人過敏との関連

	Men					Women				
	Sensitivity to evaluation	Sensitive to evaluation	Avoidance	Coach harassment	Sideline harassment	Sensitivity to evaluation	Sensitive to evaluation	Avoidance	Coach harassment	Sideline harassment
Coach-harassment	.07	.07	.02	-		.13*	.15*	-.02	-	
Sideline-harassment	.12*	.06	.14**	.26**	-	.10	.07	.01	.20**	-
TDS:Total difficulties score	.41**	.37**	.33**	.15**	.10†	.48**	.41**	.30**	.13†	.19**
Individual level	.00	.03	.00	-.05	.08	-.02	-.05	-.04	-.23**	-.02
Team level	-.16**	-.17**	-.20**	.19**	.08	.02	-.04	-.11†	.07	.04
Frequency	-.02	-.01	-.08	.07	.05	-.02	-.03	-.06	.22**	.11

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

### 研究6：スポーツの習い事を行う小学生の親の養育態度—SDQ と対象関係に焦点を当てて—

スポーツの習い事を行う小学生の親の養育態度と子要因として親の認知する子どもの困難さと親の対象関係を取り上げ、親の養育態度への関連を検討した。はじめに、小学生でスポーツを習っている子ども達の特徴は、SDQ の困難さの項目の「行為」、「多動」の分布は Matsuishi et al. (2008) の調査結果とほぼ同じであった。しかし、「情動」、「仲間関係」は高ニーズ者が多く、特に「仲間関係」は、Matsuishi et al. (2008) の約 3 倍となった。

次に、SDQ の総合的困難さと親の養育態度の関連を検討した結果、総合的困難さは親の受容的態度を弱め、統制的な態度を強める要因になっていた。子どもの総合的困難さが高いと、親の指示が通りにくいいため受容的に対応できず、力で抑えようとする統制的な態度が強まるのであろう。

さらにチームレベル別での特徴を見ると、総合的困難さは、チームレベルに関係なく母親の受

容的態度を弱め、統制的な態度を強めていた。一方で、父親はチームレベルが高い場合に「非一貫性」を強め、チームレベルが低い場合に統制的な態度になるなど、チームレベルによる変動が見られた。総合的な困難さが高い子どもの親はストレスが高い傾向にあり（大橋他，2018），地域スポーツの主な担い手である母親はチームレベルに関係なくストレスを感じている可能性が示された。

### 研究 7：発達に課題がある子どもに対するスポーツ指導に関する教材の開発と評価

指導者用の教材開発を行うために、はじめに指導者の困り感（藤後他，2022）を整理した。教材の内容は、指導者に指導前に学んでおいて欲しいことを中心にまとめた。具体的には、指導時の困り感として挙げた「指示したことが伝わらない」「集中しない」「問題行動・危険行為」「集団行動ができない」「不器用さがある」といった事柄について、それぞれの状況における、その行動の理解と具体的な対応を場面ごとに示した。教材は、パワーポイントを作成して音声を導入し、いつでも視聴できるように工夫した（Table2）。

作成した発達に課題がある子どもに対するスポーツ指導に関する教材を大学生に視聴させ、その前後に質問紙調査を実施して、教材の効果を確認した。その結果、発達に課題がある子どもの指導に関する項目については、望ましい対応への変化が見られ、成果・勝利主義の得点は教材視聴後に減少した。また、視聴後のアンケートで実施した教材への評価に関する項目では、肯定的な評価を示した。

Table2 教材の内容

教材タイトル：地域における運動に苦手さがある子ども達へのスポーツ指導－理解と支援－

サブタイトル	内容	Time
1 指導前編	・アダプテッド・スポーツとは ・発達障害についての理解 ・アセスメント（事前評価）	11：13
指導中①	・集合ができない ・示された課題が遂行できない	
2 「指示したことが伝わらない」	・言葉のまま受け取って行動する ・忘れ物が多い、時間に遅れる	12：57
指導中②	・説明している時に落ち着きなく動く ・活動にすぐ飽きてしまう	7：34
指導中③	・問題行動や危険行為をやめない	
4 「問題行動・危険行為」	・勝敗に固執して行動してしまう	7：34
指導中④	・規律が守れない ・集団が苦手 ・自分の意思をうまく表現できない	12：04
指導中⑤	・落ち着きがない ・力の加減ができない ・模倣ができない	
6 「不器用さがある」	・動きや用具の使い方がぎこちない	15：23
7 環境とまとめ	・指導者の困難「叱り方」「他者（他児・保護者）への説明」 ・アダプテッド・スポーツ二つの理論	11：36

### 研究 8：親を対象とした発達に課題がある子どもに対する対応方法の教材開発と評価

親を対象とした教材開発を行った。教材作成では、テーマを一つに絞ったほうが分かりやすく統一感が見られるため、集団の中で子どもの特性が明確になりやすいチームスポーツを取り上げ、合理的配慮に関する内容についてまとめた。教材はパワーポイント 10 枚で作成されている。本教材の各ページの内容と目的を Table3 で示した。この教材での学びを通して親の子どもへの対応や習い事への価値観の変容を促すことを目的とした。

親を対象としたオンディマンド教材を視聴してもらった結果、教材の理解や有用性は約半数以上の母親が肯定的な評価を示した。教材による学習を通して、習い事への価値観の成果・勝利主義、根性・努力主義は介入後に得点が減少した。

Table3 教材の内容

目的	教材の内容
1 配慮が必要な子の実態	配慮が必要な子に関する実態データ
2 習い事におけるハラスメント	ハラスメントの発生メカニズム
3 子どもの発達課題の理解	DSM-5の説明
4 特性の分類と具体例	特性の説明と具体例
5 特性の分類と具体例	刺激の入力方法
6 特性の分類と具体例	不器用さ
7 特性の分類と具体例	ワーキングメモリーと実行機能
8 基本的な対応方法	①子どもとの関係形成、②ルールの明確化
9 基本的な対応方法	③目で見て分かる構造、④覚醒レベルのコントロール
10 基本的な対応方法	⑤飽きさせない工夫、⑥他人と比較せずにそれぞれの課題設定

以上、本研究では、発達に課題を抱えた子ども達の地域スポーツ参加についての実態調査、およびハラスメントに関連する要因の抽出を行い、指導者および親を対象とした研修教材を開発して、その効果を検証した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 15件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵	4. 巻 49
2. 論文標題 スポーツの習い事を行う小学生の親の養育態度：SDQと対象関係に焦点をあてて（査読付）（受理）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 応用心理学研究 2023	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24651/oushinken.49.1_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵	4. 巻 10
2. 論文標題 子どもの習い事に対する親の価値観とペアレンティングスタイル：子育て絵本の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モチベーション研究	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子・大橋 恵・井梅 由美子	4. 巻 92(4)
2. 論文標題 子どもの運動に対する養育態度尺度作成の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 267-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.92.20205	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大橋 恵・ターン 有加里ジェシカ・藤後 悦子・井梅 由美子	4. 巻 93(1)
2. 論文標題 地域スポーツでの母親のボランティア継続意図：ハラスメントと公正感受性の影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 早期公開
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.93.20038	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子	4. 巻 35
2. 論文標題 小学生の指導者に求められる子どもたちの将来を見据えたコミュニケーション (特集 新入部員を迎える準備)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 コーチング・クリニック	6. 最初と最後の頁 38-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子	4. 巻 930
2. 論文標題 部活動でのハラスメント：心理職として、親として感じた違和感 (特集 Harassmentは戒めんと?)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史地理教育	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵	4. 巻 4
2. 論文標題 絵本を通じた親教育の試み：子どもの存在「Being」を重視する視点の獲得を目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早期発達支援研究	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大橋恵・藤後悦子・井梅由美子	4. 巻 4
2. 論文標題 小学生対象の地域スポーツにおける「気になる子」の実態—地域スポーツに子どもが参加している母親に対する調査より—	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早期発達支援研究	6. 最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子	4. 巻 34(6)
2. 論文標題 指導者と保護者が留意すべきスポーツハラスメント防止法 (特集 スポーツ現場の「安全管理」)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コーチング・クリニック	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵	4. 巻 10
2. 論文標題 子どもの習い事に対する親の価値観とペアレンティングスタイル—子育て絵本の効果	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 モチベーション研究	6. 最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大橋恵・藤後悦子	4. 巻 15(3)
2. 論文標題 ドイツ・ハイデルベルグにおける生涯スポーツを支えるクラブ制度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 こども環境学研究	6. 最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子・大橋恵	4. 巻 3
2. 論文標題 フィンランドにおけるジュニア期のスポーツに関する一考察 特別支援ニーズ児を含めた日芬比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早期発達支援研究	6. 最初と最後の頁 41-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 大橋 恵・井梅由美子・藤後悦子	4. 巻 14
2. 論文標題 地域スポーツにおける母親の負担感：仕事量と負担感の間を調整する要因に関する探索的検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京未来大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子・大橋 恵・井梅由美子	4. 巻 14
2. 論文標題 ジュニア期のスポーツ選手の親が指導者とチームの親達に望むこと、望まないこと - 応援席ハラスメントと指導者ハラスメントの視点から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京未来大学紀要	6. 最初と最後の頁 129 - 139
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子・井梅由美子・大橋 恵	4. 巻 9
2. 論文標題 バスケットボールをプレーする子ども達の指導者、親、応援席への期待 持続可能な開発（SDGs）と「子どもの権利とスポーツの原則」を実現するため	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 モチベーション研究	6. 最初と最後の頁 23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子	4. 巻 70（7）
2. 論文標題 応援席ハラスメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 健康教室	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井梅 由美子・藤後 悦子・大橋 恵・吉岡 尚美・内田 匡輔	4. 巻 17
2. 論文標題 発達に課題がある子どもに対するスポーツ指導に関する教材の効果	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京未来大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 161-168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24603/tfu.17.0_161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後悦子	4. 巻 25(4)
2. 論文標題 特集 子どもと暴力 子どものスポーツ・ハラスメント	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 チャイルド ヘルス	6. 最初と最後の頁 265-268
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34433/J03252.2022170318	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子・三好 真人・大橋 恵・井梅 由美子	4. 巻 47
2. 論文標題 地域スポーツ指導者が直面する困難 特別な配慮が必要な子どもへの指導を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 応用心理学研究	6. 最初と最後の頁 178～189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24651/oushinken.47.3_178	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤後 悦子・井梅 由美子・大橋 恵・吉岡 尚美・内田 匡輔	4. 巻 16
2. 論文標題 配慮が必要な子の親に対する教育教材の効果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京未来大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24603/tfu.16.0_155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 企画代表:藤後悦子(東京未来大学・会員) 企画者:大橋恵, 井梅由美子(東京未来大学・会員) 話題提供者:内田匡輔(東海大学・非会員) 大橋恵(東京未来大学・会員) 井梅由美子(東京未来大学・会員) 指定討論者:篠原俊明(共栄大学・非会員)及川留美(東海大学)
2. 発表標題 地域スポーツにおける配慮が必要な子どもへの指導
3. 学会等名 日本心理学会第86回 2022年9月 日本心理学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤後悦子
2. 発表標題 子どもも親も安心できるスポーツ環境の構築へ向けて
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井梅 由美子 ・ 藤後 悦子 ・ 大橋 恵
2. 発表標題 合理的配慮が必要な子どもたちの支援に関する教材の評価:KJ法による自由記述の分類を通して
3. 学会等名 日本教育心理学会総会発表論文集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤後 悦子 ・ 大橋 恵 ・ 井梅 由美子
2. 発表標題 子どもの習い事に対する親の合理的配慮を伴った養育態度尺度の作成
3. 学会等名 日本教育心理学会総会発表論文集
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井梅 由美子・藤後 悦子・大橋 恵
2. 発表標題 地域スポーツに参加する母子のチーム参加満足度に与える要因の検討 - チームの強さ・風土・スポーツの種類等に注目して -
3. 学会等名 こども環境学研究
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Togo, E., Ohashi, M.M., & Iume, Y.
2. 発表標題 Factors influencing parental attitudes regarding sports (2): The sports experience , parental personality(using their Interpersonal Relationships ),and attributes of their child (using SDQ)
3. 学会等名 32nd International Conference of Psychology
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大橋 恵・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 グリッドの形成に高校時代の運動部経験が与える影響
3. 学会等名 こども環境学会2021年大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤後悦子・大橋 恵・井梅由美子
2. 発表標題 応援席ハラスメントと指導者ハラスメントと子どもの発達特性との関連
3. 学会等名 こども環境学会2021年大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤後悦子・大橋 恵・井梅由美子
2. 発表標題 発達支援が必要な子どもの親に対する教育教材の効果 : 習い事を通じた関わり方と価値観
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会 PD005
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤後悦子
2. 発表標題 論文・著作・奨励賞「スポーツで生き生き子育て&親育ち 子どもの豊かな未来をつくる親子関係 」
3. 学会等名 子ども環境学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大橋 恵・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 小学生対象の地域スポーツにおける「気になる子」の実態：母親対象調査より
3. 学会等名 こども環境学会2020年大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大橋 恵・ターン 有加里ジェシカ・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 母親が小学生の地域スポーツにおけるチームサポートを継続する要因：ハラスメントと公正感受性の影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤後悦子・三好真人・大橋恵・井梅由美子
2. 発表標題 「発達障害等困難のある子ども」の地域スポーツに関わる指導者の体験
3. 学会等名 日本教育心理学会第62回総会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関口和代・遠藤 愛・溝口紀子・藤後 悦子
2. 発表標題 産業・組織心理学会第35回大会シンポジウム コーチングとハラスメントのはざままで
3. 学会等名 産業・組織心理学研究, 33(2), 131-153,
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大橋 恵 , 井梅 由美子 , 藤後 悦子
2. 発表標題 指導者によるスポーツ・ハラスメントを測定する尺度の開発(2): 中学生対象の回顧的調査
3. 学会等名 日本教育心理学会総会発表論文集, 61, 585
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井梅 由美子・藤後 悦子・大橋 恵
2. 発表標題 発達に課題のある子どものスポーツ活動への参加について: 母親へのインタビューを通して
3. 学会等名 日本教育心理学会総会発表論文集, 61, 458
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤後悦子
2. 発表標題 子ども中心のスポーツ環境の構築に向けて～勝利至上主義からWell-Beingへの転換へ～
3. 学会等名 産業・組織心理学会 第35回大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子
2. 発表標題 バスケットボールジュニア選手の期待する人的環境 指導者・親・応援席に希望すること、しないこと
3. 学会等名 日本スポーツ心理学会第46回大会 P B 32
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大橋恵・藤後悦子・井梅由美子
2. 発表標題 指導者によるスポーツ・ハラスメントを測定する尺度の開発(1) ジュニアスポーツにおける検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵
2. 発表標題 小学生の地域スポーツにおける指導者ハラスメント 指導者の過去のスポーツ経験と現在のストレス
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井梅由美子・大橋恵・藤後悦子
2. 発表標題 小中学生の親の養育態度に影響を与える要因の検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子
2. 発表標題 バスケットボールジュニア選手の親への期待 親へ希望すること, しないこと
3. 学会等名 第45回日本スポーツ心理学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 部活動指導員ガイドブック<基礎編>	

1. 著者名 藤後悦子・井梅由美子・大橋恵	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 284
3. 書名 スポーツで生き生き子育て&親育ち	



1. 著者名 藤後悦子・大橋恵・井梅由美子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 208
3. 書名 部活動指導員ガイドブック<応用編>	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> <li>・共生社会の実現に向けて（科研18K03119代表 藤後悦子） アダプティッドスポーツ <a href="https://togotokyo101.wixsite.com/mysite">https://togotokyo101.wixsite.com/mysite</a></li> <li>・共生社会の実現に向けて（科研18K03119代表 藤後悦子） アダプティッドスポーツ <a href="https://togotokyo101.wixsite.com/mysite">https://togotokyo101.wixsite.com/mysite</a></li> <li>・子ども達の よりよいスポーツ環境の 構築に向けて ~Player's First~ <a href="https://togotokyo101.wixsite.com/mysite">https://togotokyo101.wixsite.com/mysite</a></li> <li>・子ども達の よりよいスポーツ環境の 構築に向けて ~Player's First~ <a href="https://togotokyo101.wixsite.com/mysite">https://togotokyo101.wixsite.com/mysite</a></li> <li>・東京未来大学の学園祭にて科研の報告を兼ねたスポーツミーティングを実施した。2022年度、2022年度、2023年度の3年間実施済</li> </ul>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大橋 恵  (Ohashi Megumi)  (30454185)	東京未来大学・こども心理学部・教授    (32816)	
研究分担者	井梅 由美子  (Iume Yumiko)  (30563762)	東京未来大学・こども心理学部・准教授    (32816)	
研究分担者	三好 真人  (Miyoshi Masato)  (50758505)	常葉大学・教育学部・講師    (35410)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	内田 匡輔  (Uchida Kyosuke)  (00407983)	東海大学・体育学部・教授    (32644)	
研究分担者	吉岡 尚美  (Yoshioka Naomi)  (60372950)	東海大学・体育学部・教授    (32644)	
研究分担者	篠原 俊明  (Shinohara Toshiaki)  (20738306)	共栄大学・教育学部・講師    (32420)	
研究分担者	堀内 亮輔  (Horiuchi Ryosuke)  (70913408)	東京女子体育短期大学・その他部局等・講師    (42647)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関